

〔書 評〕

## チエルヌイシェフスキーの「農民 社会主義」像の一望化

— 残された今日的課題 —

武井 勇四郎 著 『チエルヌイシェフスキーの歴史哲学』

国 分 幸

クリミア戦争の完敗 (1856 年) によってロシアは近代化＝農奴解放を余儀なくされたわけであるが、チエルヌイシェフスキーの歴史哲学的に基礎づけられた「農民社会主義」(231) は、当局側によるさし迫った農奴解放に対するオルタナティブとして、1862 年に逮捕されるまでの比較的短期間に集中的に提起されたものである。本書はこれをスターリニズムに呪縛されることなく、彼の著作に内在しつつ解明し、その全体像を一望化したものである。まずは論点を要約しつつ、次いでわれわれに残された社会主義の今日的課題について論ずることとする。

### 1. ロシアの歴史の独自路線あるいは 歴史過程の飛躍・短縮論

クリミア戦争後の移行期においては、① 西欧型資本主義による近代化と ② 農村共同体を母体とした同胞体社会の実現による近代化という二つの路線が想定された。ハクストハウゼンの『ロシアの国内状態』(1852 年) の出版以来、様々な共同体論が出現したわけであるが、上記のいずれの路線に対してもその影響は顕著である。チエルヌイシェフスキーが後者を選択した論拠は本書によれば次の三つである(121, 149-51, 154)。第一に、① 共同体的所有 → ② 私的所有 → ③ 高次の共同体

的所有という歴史の三段階的發展論である。ロシアは②に向かい出しているが、完全に②に突入すれば「プロレタリアートの潰瘍」を生み出すことになる。ロシアにはしかし②を経なくても③に移行する独自の道があるとする。第二に、共同体的協業は労働の生産性を向上させること、第三に、「所有者＝労働者＝受益者」となれば、生産のエネルギーが十分發揮されること。

チェルヌイシェフスキーが取り分け心血を注いだのは第一の論拠の証明である。彼はヘーゲル弁証法を用いて共同体的土地所有 → 資本主義的土地所有 → 社会主義的共同体的土地所有の必然性を説きつつも、「一定の条件」があれば、アンチテーゼとしての資本主義的生産様式を西欧が歩んだとおり歩まずに、西欧の文物を短期間に摂取して第二段階を「短縮」し、ジンテーゼとしての共同体に至りうる可能性が十分にありうるとする。クリミア戦争以来ロシアの経済活動は西欧化によって急速に進展している点を考慮し、彼はアンチテーゼの期間を30年程度とする。「一定の条件」とはロシアの共同体的土地所有と共同体的慣行・精神である(121, 184)。マルクスとエンゲルスはこのような近代化路線に好意的な態度を示しているが(『ザピスキ』編集部への手紙1877年)、彼らの結論はしかし「ロシア革命が西ヨーロッパのプロレタリア革命の合図となり、その結果両者が互いに補い合うならば」という条件付きであった(『共産党宣言』ロシア語版序文1882年、「亡命者文献5 ロシアの社会状態」1875年)。

## 2. チェルヌイシェフスキーの対案 ＝「組合的同胞体」の構想

農奴解放に関するチェルヌイシェフスキーの対案には、まさに「農民社会主義」という相貌が濃厚である。彼と社会主義との出会いは学生時代に経験した1848年の西欧革命にまでさかのぼる。この事件を通じて彼はルイ・ブランやブルードンなどを知り、フーリエ主義の研究サークルである「ペトラシェフスキー会」とも接触を持った。彼の対案の基軸となる「生産者＝所有者＝受益者」の「アソシエーション」＝「組合的同胞体」(117, 213)は、農業を基本とするものである限りフーリエのファランジュの「同型写像」とも言えるものである(207)。

「組合同胞体」の諸原則(構想内容)は次の如くである。①私的所有権を全廃した共同体的所有(118)。②無階級、無交換で、自己消費(自給自足)を原則とし、

交換は副次的である（197, 229）。③ 市場「競争」に代わる「経済的有益の計算」、すなわちベンサム的な「最大多数の最大幸福」を目標にしつつ、「必需品生産と非必需品生産の合理的比率、それらへの労働諸力の配分」を確定し「需要と供給の均衡」をもたらす有益計算にもとづく計画経済（197, 227, 330）。④ 生産物の平等な取得、労働量に比例した分配＝報酬（198, 229）。⑤ 「自己管理」、「経営への共同参加」（197, 206）。⑥ 組合的同胞体の規模は2000人止まり。「経済的有益の計算」は「小単位」には通じて「一国単位」には通じないからである（230）。

### 3. 「組合的同胞体」相互間の交換と その様式の問題

組合的同胞体は農業を基本とし自給自足を原則にするとはいえ、完全な自給自足は所詮望むべくもない。ましてや、歴史過程を短縮するため、西欧資本主義が達成した諸成果を取り入れ、農業の近代化、つまり機械化、さらには大規模協業化を図るとなれば、農業を基本とした同胞体が多数を占めるにしても、工業を基本とした同胞体の存在も少なからず不可欠である。とすれば、ここに何百何千という同胞体間の交換の必要性が予想される（230）。チェルヌイシェフスキーによれば「交換過程最大の不合理」は「労働が商品として売買される」、「人間が商品、物と交換される」ことにある（221, 231）。この点は「人間性にもとる最大の現象」として断罪されるはするが、彼は交換それ自体を否定しているわけではない。彼は相互交換の必要性を認めているが、にもかかわらず彼はこの交換とその様式についてはあまり語っていない。

シベリア追放がこの問題について考察し語る機会をチェルヌイシェフスキーから奪ってしまったにしても、しかし彼はアソシエーション相互間の交換の様式を重大な問題として当然認識していたはずだし、だからこそ寡黙であった可能性もきわめて高い。というのも、この問題（交換の様式は①競争原理〔市場〕的なものか、②非競争原理的なものか）は当時の大問題の一つであり、チェルヌイシェフスキー（1828生）が学生時代に心酔したブルードン（1809生）とルイ・ブラン（1811生）はこの点をめぐって鋭く対立していたし、加えるに、彼が「評注」を書いたJ.S.ミル（1806生）『経済学原理』の第4版（第4篇7章7節）には①の立場を支持する明示的な言及があるからである。ブルードンはルイ・ブランの国家管理主義的な立場を

次のように批判している。「ブラン氏は決して権威〔国家〕に訴えることを止めず、そして社会主義は声高に自らをアナーキズム的であると言明する。ブラン氏は権力を社会の上に置き、そして社会主義はそれを社会に従属させようとする」(『経済的諸矛盾の体系あるいは貧困の哲学』1846年)。ブルードンの視点から分類すれば、①非競争原理に立脚するのが共産主義であり、②競争原理に立脚するのが社会主義ということになる。ちなみに、『哲学の貧困』でブルードンの当書を批判したマルクス(1818生)は上記の如きブルードンによるルイ・ブラン批判には一言も言及しておらず、この時点での彼の立場は多分にルイ・ブラン寄りである。このことは『共産党宣言』における「国家の生産管理機関化」に関する肯定的な言及にもにじみ出ており、当書の1890年版序文における、カペーやワイトリングといった人たちの集権的な「一国一工場」型共産主義を引き合いに出したエンゲルスによるその命名の由来の説明に関しても同様である。かくして、ブルードン、ミル contra ルイ・ブラン、マルクスという構図が浮かび上がる。

チェルヌイシェフスキー自身は、ルイ・ブランの影響によるものと考えられるが、競争原理を否定する立場にある。他方ミルは市場競争を肯定している。当然チェルヌイシェフスキーの内面では二つの立場をめぐる葛藤があったであろう。それはともかく、彼の場合にはルイ・ブランのような一大アソシアシオン(一国一工場)構想は成り立たない。その理由は、先に述べた同胞体の諸原則の⑥にあるように、「経済的有益」の計算は「小単位」には通じても「一国単位」には通じないとする認識にある。このような認識に立ちながら、「非市場」原理を貫徹しうるものとして構想されているのが「仲介」(231)という同胞体間交換の様式である。チェルヌイシェフスキーにはこの点に関するそれ以上の言及は見られないが、しかし同様の交換様式を追求したR. オーエンにはもっと立ち入った議論の展開が認められる。オーエンによれば、諸共同体＝アソシアシオンは交換のために差し当たりユニオンを取り結ぶ。それはやがて「同盟」による全国的な計画的規制に発展するが、そこから予想される帰結はルイ・ブラン同様の集権的な一国一工場体制である。これはデスポティズム＝総体的奴隷制という抑圧体制を出来させるものでしかありえない(詳しくは拙著『デスポティズムとアソシアシオン構想』第9章を参照のこと)。

ブルードンやミルの唱える社会主義は、これに対して交換の様式として市場競争を認めるものであり、それに付随する諸問題を伴うにせよ、その限り社会は分権化され、デスポティズムを招来する一国一工場体制は未然に防止される。しかのみな

らず、アソシアシオンの利潤分配制は「労働力商品」の揚棄をも可能にする。

#### 4. 共同所有，共同体的所有，組合的所有的 区別と連関の問題

チェルヌシシェフスキーによれば、歴史の三段階は次の如くである。① 共同体的所有〔原始共同体〕，② 私的所有〔資本主義的所有〕，③ 共同体的所有〔組合的社会主义的所有〕（149）。③は「高度の水準」あるいは「高次元」における①への復帰であるとされる。かつこ内の言葉はそれを明示するための著者による補注である。組合的社会主义的所有については、a 共同体的所有のみの階梯，それに加えて b 共同体的生産（協働）が行われる階梯，さらに加えて c 共同体的消費が行われる階梯の三つがあり，a b c の三要素が出そろった第三の階梯が最も理想的な最終的共産主義社会であるとされる（150）。しかしこう言われても③の所有形態が高次であるゆえんは依然として明らかではない。単に生産力が高度化している故ではないとすれば、両者の段階的差異は補注に言う「組合的所有」という点に求められねばならないであろう。しかしaの共同体的所有は三階梯に貫通するのであるから、「組合的所有」と言ってみても、チェルヌシシェフスキーの場合それは、「平等な人々が共同経営する」という付加語を伴うにせよ、所詮「共同体的所有」の別名でしかないと言えよう。

組合的所有とは一体何か、はたしてそれは共同体的所有なのであろうか？ これが問われねばならない肝心な問題である。一般的に言えば、共同体的所有は組合的所有と同様に共同所有の一形態であり、その限り三者は区別される。このような理解に立つならば、先の三段階論からする限りチェルヌシシェフスキーは共同所有と共同体的所有を同一視していると言える。それはミールによる共同体的所有（厳密には占有）の現存というロシアの特殊事情に制約されたためかもしれない。しかしマルクスやエンゲルスにおいても、復帰すべき共同所有の高次形態は新たな共同体的所有という意味合いで長らく語られてきたことからすれば、そうした同一視はかなり一般的であったとも言える。マルクスがこの高次形態は共同体的所有ではなく「組合的所有」であることを、きわめて曖昧な仕方ではあるが、初めて語り出すことができたのはようやく『資本論』（第2版1872年）においてのことである。曰く、「生産手段に対する労働者たちの共同所有にもとづき……個々人的所有を再建す

る」。スターリン主義的な「共同所有＝国有」とはおおよそ異質の、個々人的所有と両立するこの共同所有をめぐり、わが国では今日なお解釈論争が続いている。それがアソシエーション的＝組合的所有を意味するとする見解はしかしいまだごく少数の意見にとどまっており、共通理解とはおおよそ程遠い事情にある。この一文における「共同所有」はフランス語版（1875年）では「共同（集団）占有」と改訂されるに至るが、基本にある所有の形態は「個々人的共同所有」という組合的所有である点に変わりはない。ただマルクスの場合この組合が「一大組合」として一国一工場的に構想されている点に重大な問題がはらまれている（『ゴータ綱領批判』1875年）。こうした構想は、市場を廃止した計画経済（どのような形態のものであれ）という立場をとる限り、不可避であると考えられる。

（法律文化社刊，2000年3月，A5判，328頁）